

平成 30 年度第 2 回逗子市地域福祉計画・逗子市地域福祉活動計画懇話会概要

日時 2019 年（平成 31 年）2 月 19 日（火）

午前 10 時 00 分から午前 11 時 54 分

場所 市庁舎 5 階 第 4 会議室

・出席者 24 名
(メンバー15名、アドバイザー1名、市職員4名、市社会福祉協議会職員4名)

・傍聴者 なし

・議題 計画「追補版」素案について

・意見概要

(アドバイザー)

地域福祉の計画は、短期間に大きく変わるべきものではないが、ライフスタイルや社会的背景が変わっていく中で、新しい要素や変わったところを追補という形で計画に盛り込んだもの。

元の計画を維持しつつ追補版とした意味合いは3点ある。1点目は、基本的な考え方は変わらないという点。2点目は、現在の動きに合っているかをこの機に確かめること。3点目は、計画で挙げられたそれぞれの役割やできることが身近なところにある具体的な活動となっているかを確かめること。

(メンバー)

手薄の問題を掘り下げるために包括相談支援体制を作ろうという点は素晴らしい。「高齢・障がい・子育て分野等におけるネットワークとの連携」を優先して進めて欲しい。そして、私たちは、この体制の一端を担っていくものだと感じている。市・市社会福祉協議会には、個々の団体、活動同士の横のつながりが持てるミーティング等を主導してもらい、共有された情報は、それぞれの団体で発信し広げていくことができると考えている。住民側にどのような福祉教育が必要か、そのアプローチの仕方も様々に考えていただきたい。

市内のボランティア団体の課題は、高齢化とそれに伴う活動人数の減少。福祉教育やネットワークの構築を考えるに当たっては、対象者をよく見極めて実施方法を考えて欲しい。

地域住民間に共生の雰囲気が醸成していかないと、実際に課題を抱えている人の支援にはつながらないだろう。将来を見据え、社会保障の危機的状況などの課題を伝えていかないと住民の関心を福祉へ向けられないのではないか。

→ (他のメンバー)

障がい者の親の会でも、親が亡くなるケースも相次いでおり、残された障がい者をどうするかという課題に直面している。今後、障がい者の支援にも関わってもらえるような地域の身近な相談体制が整うと心強い。

→ (他のメンバー)

障がい者の相談支援機関でも親亡き後の障がい者の「終の棲家」や遺産の処分などは、非常に大きな関心事となっており、親に対する準備の取り組みを進めている

地域包括支援センターとの相互乗り入れを行い、日頃から情報交換や関係作りに取り組んでいる。また、障がい福祉の分野では、地域生活拠点を作ることが求められている。人に言われて意識が向くのではなく、関心づくりから始める必要があり、学校は地域福祉の拠点になり得るだろう。

福祉教育の実践に当たっては、ただボランティアを呼びかけるだけでなく、地域で助け合って生活していく重要性を地域へ向けて発信して欲しい。

追補版はよくできてきている。「アプローチ」にある具体の取り組みを実施するために、しっかりと予算を確保した上で事業を展開して欲しい。また、追補版で重点化された施策については、さらに細分化してシステムティックに達成度をチェックしていくべき。

お互いさま活動や住民自治協議会の活動が緻密になっていけば、地域の目や住民同士のネットワークはかなり行きわたっていくだろう。子ども食堂から広まった児童見守り隊のような事例を発信することで、地域住民の福祉的な思考につながり、地域全体がより良い方向へ向かっていくきっかけになるだろう。

→ (他のメンバー)

地域の良い活動、世代に応じた媒体で情報を発信できる人材を置き、地域の実情を広めて欲しい。

福祉に関心を持ったり福祉を紐解いたりする方法としては、事例を知ることが一番である。個人情報の問題があり、大勢で情報共有するような効果的な福祉教育というのはとても難しい課題だと思うので、法律上書かれている地域住民にできることを知識として学ぶ機会があってもよいと思う。

市役所の部署それぞれに福祉と連携を図る担当者がある体制が欲しい。また困りごと事例を地域と共有して、地域での支援に活かせるような機会を設けて欲しい。

地域住民の福祉意識の醸成の必要性は痛感している。福祉に関わる人のすそ野が広がっていくような広報活動と内容づくりに取り組んで欲しい。小・中学校で定期的に実践を行っているような福祉教育を、地域でも実践して欲しい。

(アドバイザー 総括意見)

メンバーから出された各意見は、もつともだと思えるものが多い。しかし、追補版に書き著したり大幅な修正を加えたりする必要はないだろう。

メンバーの意見は、横の連携を求めている点で共通している。連携を進めるためには、仕組みづくりも必要だが、土台は人と人とのつながりや人を思いやる心を醸成することに尽きる。それを文字で表すのはとても難しいが、「アプローチ」を具体化して今後の取り組みとして示すことはできるだろう。それは、新たな取り組みを作るというよりは、今ある活動や取り組みを見直したり発展させていったり、単体でやっている活動同士を繋げていったりする中で、ひらめきや新たな取り組みが生まれればよいのではないか。取り組みの積み重ねが連携につながっていくと考えられる。

進行管理に当たっては、計画の各節目で、成果を目に見える形で示す必要がある。今回の中間評価でもメンバーから多く指摘があった部分なので、今後はしっかりと指標を策定していかなければならない。

追補版では、横の連携や活動者同士のつながりが今後の課題とされているが、具体的にどう取り組んでいくのかが示されていない感は否めない。素案については、考え方には賛同するし、メンバーの了承も得たと解せるので、具体的にどう進めていくかという議論を次回以降の懇話会へ向けて進めて欲しい。同時に、懇話会の在り方についても見直しを図る必要があると感じている。